

# SUNDAY NIKKEI

## 原発事故と放射線のリスク学

中西 準子著

原発「推進」でも「反対」でもない専門家による安全性に関する解説書。これだけでこの著書の「珍重さ」がわかっていただけだろうか。書店に並ぶほとんどの「原発」本は、放射線について「安全」か「危険」の色分けがしっかりとできている。これが著者のいう「リスクはゼロにはならない」、「リスク管理には必ずトレードオフ(一つのリスクを減少させようとすると別のリスクが増大する)」があるという事実を直視させなかったのではないか。本書はまさに、この重要な事実を読者が直視するための書である。

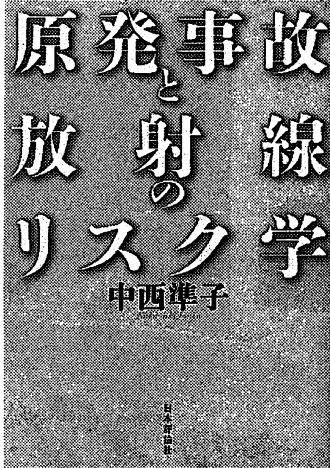
著者はみずから「放射線の専門家ではない」と宣言しつつ、「化学物質のリスク評価、リスク管理」を専門としてきた研究者として、福島事故以降放射線リスクの問題に取り組んできた。その3年間の成果をまとめた本書は、福島除染、復興、そして避難民の帰還といった、我が国が抱える苦悩を解決するうえで、どうしても避けては通れない「放射線リスク」に関する重要な分析・提言書である。放射線のリスクを概説した第

### 除染・帰還論議に現実的提言

1章も必読だが、特に読みたえがあるのが「原発事故のリスク」と題した第2章である。このなかで、これまでタブーとされてきた「除染目標」にしっかりと踏み込み、自らの判断・根拠に基づいて「15年間の被ばく線量が100ミリシーベルトを超えないことを条件に年5ミリシーベルトが適切」と提言。その場合でも「リスクゼロとは言わないこと」と、これまでの政府や一部専門家の説明にしっかりと釘をさすところが著者らしい。「社会が受容できるリスク目標」を丁寧にわかりやすく説明したこの根拠ある提言は、賛否両論があるだろうが、これまでの除染・帰還政策議論に全く欠けていたものであり、ぜひ関係者間で議論のたたき台として参考にしてほしい。

この他、本書の特徴として、専門家らとの対談が含まれており、中でも除染の経済学についての飯田泰之氏との議論は、除染と賠償を考えるうえで興味深い示唆を与えている。

私は、原子力委員を退任するときに、「合理性」だけではなく、政策にも「人間性」が必要だと訴えた。本書はまさにその「合理性」を追求したものといえるが、「あとがき」のところで「(原爆被爆という)歴史的な経緯に触れた著者の一言に、「人間性」を垣間見たような気がした。まさにこのような「リスク学」が今我々に必要なのではないか。ぜひ一読をお奨めする。



(日本評論社・1800円)

なかにし・じゅんこ 38年生まれ

東大教授などを経て、産業技術総合研究所フェロー。専門は環境工学。著書に『リスクと向きあう』など。

《評》長崎大学核兵器廃絶研究センター副センター長

鈴木 達治郎